

正法眼蔵のサ変動詞

——その用例(二十)(漢字九字以上)[完]——

田 島 毓 堂

はじめに

前稿「正法眼蔵のサ変動詞——その用例(十九)(漢字七字・八字)——」に続いて、九字以上のもの、すなわち、漢字九字・十字・十二字・十六字・十九字・三十二字のもの十一種(計十一例)について、同様に用例を挙げ、若干の解説を加えようと思う。その掲げ方等については、前稿に示したとおりである。前もつて言えば、一応「漢語サ変動詞」としてはいるが、一般性のある語ではなく、一回限りの臨時的なものばかり、しかも、一語とするには種々意見のあるはずのものばかりである。

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(二十)——(田島)

一、漢字九字のサ変動詞の用例

(1) 往無辺劫海転妙法輪ス(一例・自)体1《ナリ》
成無上菩提カヘリテ出家ノ日ヲ成菩提スルナリ、マサ
ニシルヘシ、出家ノ日ハ一異ヲ超越スルナリ、出家ノ日
ノウチニ三阿僧祇劫ヲ修證スルナリ、出家之日ノウチニ
往無辺劫海転妙法輪スルナリ、出家ノ日ハ謂如食頃ニア
ラス、六十小劫ニアラズ、三際ヲ超越セリ、頂鬚ヲ脱落
セリ(出家十五43ウ1 下124-14)
「往無辺劫海転妙法輪」を訓読すれば「無辺劫海ニ往キ
テ転妙法輪ス」と読める一文にスを付けて一つの動詞の如
く扱っているのである。「往」は乾坤院本では「住」と

なっている。古本は多く「住」となっている。俄にその適否を言うのは難しいが、ここでは時間のことが主たる問題になっていることを考えると、「住」の方がいいように思えるが、「住」でいけないこともない。「無辺劫海において(住して) 転法輪(説法)する」でも「無辺劫海まで行って説法する」でも、時空を超えているというのだから、この二字のどちらかは、判断が難しい。本山版は「住」。道元禅師全集本(以下「全集本」)は本山版にしたがっている。この例が通常の一語でないことは明らかである。何かの典拠をふまえた語句であるように思えるが、その典拠は明めていない。

(2) 参来参去参到参不到ス(1例・自)体1《連体中止》
 恧麼ノコトク参来参去参到参不到スル、有時ノ時ナリ

(有時四69才4 上165-9)

「このように参じきたり参じさり、参じ至り、あるいは参じ至らない、というのが、『有時』の『時』である」。

このように、とはそのまえにある、「教伊揚眉瞬目也半有時、教伊揚眉瞬目也錯有時、不教伊揚眉瞬目也錯錯有

時」「伊ヲシテ揚眉瞬目セシムルモ也タ半有時、伊ヲシテ揚眉瞬目セシムルモ也タ錯有時、伊ヲシテ揚眉瞬目セシメザルモ也タ錯錯有時」の三つの場合を挙げて、そのように縦横無尽に、各方面から参学することを「有時」の「時」だというのである。

正法眼蔵の時間に関する神髓の説であり、ここで簡単に説明する力量を筆者は持ち合わせていない。あらゆる事も物も「時」の中で生起・存在している、その生起・存在していることが「時」だという理解は浅薄すぎるだろうか。

サ変動詞と認めることについて、岩波文庫本(本山版)は、「参来参去」で読点を打って、後の五字をスルが受けているような理解である。しかし、この九字をひとまとめにして、「スル」と受けていると考える。

(3) 祇管与官客相見追尋ス(1例・自)体1《ノミナリ》

某甲ソノカミ径山ニ掛錫スルニ光佛照ソノトキ粥飯頭ナリキ、上堂シテ云、佛法禅道カナラスシモ他人ノ言ウヲモトムヘカラス、タ、各自理會、カクノコトクイヒテ僧堂裏都不管ナリキ、雲来兄弟也都不管ナリ、祇管与官

客相見追尋スルノミナリ（行持下四24ウ3 中65―1）

このなかの「雲来」は岩波本は「雲水」となっている。

「祇管ニ官客与相見シ追尋ス」（ひたすら、役人関係の来客に会うことで追い回される）と訓読できる一文をスで受け一つのサ変動詞にしているのである。正法眼蔵での常套的な造語法である。これを最後の「追尋」だけをサ変動詞として読むことが出来ないわけではないが、正法眼蔵の語法ではなからう。

（4）無量百千万億度作佛ス（1例・自）未《リ》

此菩薩ト彼菩薩ト二人ニアラス、自他ニアラス過現当
来箇々アラサレトモ作佛ハ行菩薩道ノ法儀ナリ、初発心
ニ成佛シ妙覚地ニ成佛ス、無量百千万億度作佛セル菩薩
アリ（諸法九19オ3 中37―6）

「無量百千万億度」は「作佛」を副詞的に修飾している。こういう場合も一つのサ変動詞としているのであるが、幾つかのサ変動詞を積み重ねたのを一つのサ変動詞としたり、上記（2）で上の四字と下の五字を分割しているものを一つにしたりすると同様である。上記（3）の例とは

正法眼蔵のサ変動詞——その用例（二十）——（田島）

少し様子が違うけれども、「ス」がそれを受けていると見るのである。

（5）禮拜供養釈迦牟尼佛ス（1例・自）用《タテマツル》

ヒトタヒ袈裟ヲ身体ニオホフハステニコレ得釈迦牟尼
佛之身肉手足頭目髓脳光明転法輪ナリ、カクノコトクシ
テ袈裟ヲ着スルナリ、コレハ現成着袈裟功德ナリ、コレ
ヲ保任シコレヲ好樂シテトキト、モニ守護シ搭着シテ禮
拜供養釈迦牟尼佛シタテマツルナリ、コノナカニイク三
阿僧祇劫ノ修行ヲモ弁肯究盡スルナリ（陀羅尼十33オ10
中292―13）

「釈迦牟尼佛ヲ禮拜供養ス」という一句に「ス」を付けてサ変動詞化したものである。

漢字九字にスを付けてサ変動詞化した例は、いずれも臨時的な造語である。全て一回のみの使用である。（4）のように、二字サ変動詞に七字の修飾語がついたように見えるものもあつた。

二、漢字十字のサ変動詞の用例

(一) 三年五年二十年三十年ス(一例・自) 未《ム》

ナンタチ諸人コノ一段大事ヲエントヲモハ、究理坐禅シテミルヘシ、三年五年二十年三十年セシニ道ヲエストイハ、老僧カ類ヲトリテ杓ニツクリテ小便クムヘシ。カクノコトクチカイケル、マコトニ坐禅辨道ハ佛道ノ直路ナリ、究理坐看スヘシ(柏樹八45オー 中107―4)

時間の経過を示すサ変動詞の用法で、語幹部分が、この例では長くなっただけであり、特に問題とすることはない。ただ、こういうものをサ変動詞に入れない考えもある。本稿では、サ変動詞を幅広く採取することを基本としているので、この例も、漢語サ変動詞として採用した。語幹が十字の例はこれだけである。

三、漢字十二字のサ変動詞の用例

(一) 見釈迦牟尼佛成釈迦牟尼佛ス(一例・自) 体《ヲ》

オホヨソ一切諸佛ハ見釈迦牟尼佛成釈迦牟尼佛スルヲ成道作佛トイフナリ。カクノコトクノ佛儀モトヨリコノ

七種ノ行処ノ條々ヨリウルナリ(見佛十二5ウ4 中347―5)

「見釈迦牟尼佛」という句は、直前の引用漢文による。法華経普賢菩薩勸発品の「若有受持読誦正憶念修習書写是法華経者、當知是人則見釈迦牟尼佛。如從佛口聞此經典。當知是人供養釈迦牟尼佛。當知是人……」の傍線部分に続いて、上記の「オホヨソ……」以下が説示される。「成釈迦牟尼佛」の句は、正法眼蔵にはこの一回だけの使用である。道元禅師が、「見釈迦牟尼佛」に倣って造語したものであろう。他に、この「見佛」の巻には「請釈迦牟尼佛」という句があり、「請佛トイフハ請釈迦牟尼佛ノミニアラス……」とある。これから見れば、「成釈迦牟尼佛」は「成佛」ということに他ならない。「成道作佛」と言っているのと同じことである。「釈迦牟尼佛ヲ見、釈迦牟尼佛ニ成ル」と訓読できる句をまとめてサ変動詞化したものである。

(二) 知家非家捨家出家入山修道ス(一例・自) 体《ナリ》
他ノス、メニヨリテ片善ヲ修シ魔ニ嬖セラレテ禮佛ス

ル、マタ発菩提心ナリ。シカノミナラス、知家非家捨家
出家入山修道シ信行法行スルナリ、造佛造塔スルナリ、
讀經念佛スルナリ、為衆說法スルナリ、尋師訪道スルナ
リ、跏趺坐スルナリ、一禮三寶スルナリ、一称南無佛ス
ルナリ、カクノコトク八萬法蓋ノ因縁カナラス發心ナリ
(發菩提心三十八) 中398-8)

この例、次項の十六字の例と同じものである。即ち、右
の例では、「入山修道シ」と切れているので、次の「信行
法行ス」は別に四字漢語の例としてあるのである。ところが、この例、乾坤院本でも、「知」の左に「三」、「非」の
左に「二」、「家」の左に「一」、「捨家」「入山」はそれぞ
れレ点がある。「シ」は本行の字と同じ大きさであり、他
に振り仮名・送り仮名はないので、この十二字ひとまとま
りとしたのである。岩波文庫本では、下の「信行法行」を
含めて十六字をそれぞれ四字ずつに切り、「家ノ家ニ非ル
ヲ知りテ、家ヲ捨テテ出家シ、入山修道シ、信行法行する
なり」(片仮名部分が送り仮名)としているのである。こ
のようにあれば、本稿の立場では、「知家非家捨家出家入
山修道信行法行ス」という、十六字サ変動詞とすることに

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(二十一)——(田島)

なる(本稿は七十五卷本の乾坤院本を元にしてしているので、
次項の十六字サ変動詞はないことになる)。

これは、右記のように訓読できる一句を一サ変動詞とし
たものである。

四、漢字十六字のサ変動詞の用例

(1) 知家非家捨家出家入山修道信行法行ス

この例については、前項で述べたとおりである。岩波文
庫本に依ればこれを挙げるべきであり、前項の(2)と四
字漢語サ変の「信行法行ス」は削除すべきことになる。

五、漢字十九字のサ変動詞の用例

(1) 一生万生把尾収頭不離叢林尽夜祇管跏趺坐ス(1)

例・自)用《テ》

初祖西来ヨリサキハ東土ノ衆生イマタカツテ結跏趺坐
ヲシラサリキ。祖師西来ヨリノチコレヲシレリ。シカア
レハスナハチ一生万生把尾収頭不離叢林尽夜祇管跏趺坐
シテ余務アラサル、三昧王三昧ナリ(三昧十四4ウ9
下16-5)

乾坤院本ではここに訓点はないが、岩波文庫本では「一生万生、把尾取頭、不離叢林、盡夜祇管跏趺坐して」と句読点と、返り点が付されている。こういう句あるいは文を丸ごとサ変動詞化しているのである。「一生万生、尾ヲ把リ、頭ヲ取メ(徹頭徹尾、終始一貫の意)、叢林ヲ離レズ、夜ヲ盡シテ、祇管ニ跏趺坐ス」ということである。

六、漢字三十二字のサ変動詞の用例

(一) 迦葉佛時曾住此山釈迦佛時今住此山曾身今身日月面
面遮野狐精現野狐精ス(一例・自)体《ナリ》

マタイハク不味因果ハ因果ニクラカラストイフハ大修
行ハ超脱ノ因果ナルカユヘニ脱野狐身ストイフ、マコト
ニコレハ八九成ノ参学眼ナリ、シカアリトイヘトモ迦葉
佛時曾住此山釈迦佛時今住此山曾身今身日月面遮野狐
精現野狐精スルナリ、野狐イカニシテカ五百生ヲシラン
(大修行十四12オ9 下59ト12)

乾坤院本に訓点はないが、岩波文庫本は四字ずつに切り、「曾住ニ此山ニ」今住ニ此山ニ「遮野狐精」「現野狐精」と返り点を付けている。ただ、この三十二字全体

が、「スル」で受けられているというように見てはいるようであり、この返り点は、理解を助けるためのものである。この通りの字句は無いが、この「大修行」巻の最初の引用文「天聖広灯録百丈章」に「迦葉佛時曾住此山」が出ている。その他「脱野狐身」という句もある。

高橋賢陳氏の現代語訳では「以前迦葉佛の時にはこの山に住した、今釈迦佛の時にはこの山に住すると言う、その以前の身と今の身とは、野狐の精霊が隠れたか現れたかの相違であって、結局は同じものである」としている。「日月面」は「日月面佛、日月面佛」の略で長命と短命を意味すると言われる。また、「太陽」と「月」のことともされるが、この訳には何処にそれが現れているかよく分からない。増谷文雄氏の現代語訳では「かつて迦葉佛の時からこの山に住み、いま釈迦佛の時にもこの山に住んでいて、昔も今もいつこう変わることはない、あの野狐、この野狐としてその姿を現じているのである」とし、「日月・月面」を「いつこう変わったところがない、というほどの意」とされているのが分かりやすい(増谷文雄『現代語訳正法眼蔵』第七巻、一九七五)。分かり切っているというのだから

うか、他の、訳や講義録等、このところにふれずに通っているものが多い。

以上、漢字九字以上のサ変動詞について用例を掲げて説明した。九字のサ変動詞五語(五回)、十字一語一回、十二字二語二回、十九字一語一回、三十二字一語一回である。十六字のものも参考のために掲げた。

おわりに

昭和四十九年の「正法眼蔵のサ変動詞——その用例(一)——」から、途中の中断を挟んで長期にわたり、その用例を掲示してきた。その前に、サ変動詞についての考察や、その間にも関連の論考を公にした。ともあれ、七十五巻本の用例については、掲載を完了した。感無量である。念のために、その足取りを記しておく。

「その十八」に掲載した注をここに再び掲載し、略解する。サ変動詞に関して、過去、以下の論考を発表した。

①「正法眼蔵の語法——サ変動詞について・序説——」『宗学研究』一〇一九六八……源氏物語のサ変動詞と比較して正法眼蔵のサ変動詞の特徴を示した。

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(二十)——(田島)

②「サ変動詞について——漢語サ変動詞の構造——」『東海学園国語国文』一一九七〇……正法眼蔵のサ変動詞の文法的構造を分析した。

③「正法眼蔵の語法——漢語サ変動詞について——」『名古屋大学国語国文学』二六一九七〇……正法眼蔵の漢語サ変動詞について、その特色を述べた。

④「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(一)——」『東海学園女子短期大学紀要』九一九七五……正法眼蔵のサ変動詞全般について述べ、単独のサ変動詞(漢語サ変動詞でないもの)について用例を掲げた。

⑤「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(二)——」『東海学園国語国文』七一九七五……正法眼蔵の和語サ変動詞を掲げ、次に漢語サ変動詞の全体を掲げた。

⑥「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(三)——」『東海学園女子短期大学紀要』一〇一九七五……正法眼蔵の漢字一字のサ変動詞の用例二一八語を掲げた。

⑦「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(四)——」漢字二字ア〜カ『東海学園国語国文』八一九七五……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞ア〜カ(二五八語)を掲げた。

⑧「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(五)——」漢字二字キ〜ケ『東海学園国語国文』九一九七六……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞キ〜ケ(二六九語)を掲げた。

⑨「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(六)——」漢字二字コ〜

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(二七)——(田島)

シモン」『東海学園国語国文』一〇 一九七六……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞コシモン(二六九語)を掲げた。

⑩「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(七) 漢字二字シャシユン」『東海学園女子短期大学紀要』一一 一九七六……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞シヤシユン(八八語)を掲げた。

⑪「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(八) 漢字二字ショシケン」『東海学園国語国文』一一 一九七七……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞ショシケン(二七七語)を掲げた。

⑫「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(九) 漢字二字ソ」『東海学園女子短期大学紀要』一二 一九七七……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞ソ(六八語)を掲げた。

⑬「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十) 漢字二字タクト」『東海学園国語国文』一二 一九七七……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞タクト(一八六語)を掲げた。

⑭「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十二) 漢字二字ナホ」『東海学園国語国文』一三 一九七八……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞ナホ(六二語)を掲げた。

⑮「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十二) 漢字二字マシワ」『東海学園国語国文』一四 一九七八……正法眼蔵の漢字二字サ変動詞マシワ(二三三語)を掲げた。

⑯「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十三) 漢字三字」『東海学園国語国文』二四 一九八三……正法眼蔵の漢字三

字サ変動詞(八九語)を掲げた。

⑰「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十四) 漢字四字アシコ」『東海学園国語国文』三二 一九八七……正法眼蔵の漢字四字サ変動詞アシコ(八九語)を掲げた。

⑱「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十五) 漢字四字サシソ」『東海学園国語国文』三三 一九八八……正法眼蔵の漢字四字サ変動詞サシソ(一一七語)を掲げた。

⑲「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十六) 漢字四字タクフ」『東海学園国語国文』三九 一九九一……正法眼蔵の漢字四字サ変動詞タクフ(八三語)を掲げた。

⑳「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十七) 漢字四字ヘシワ」『東海学園 語学・文学・文化』一 二〇〇一……正法眼蔵の漢字四字サ変動詞ヘシワ(四五語)を掲げた。

㉑「サ変動詞の話——異文化移入の一方法としての正法眼蔵の表現の一特徴——」『道元禅師研究論集』二〇〇二……正法眼蔵のサ変動詞、特に漢語サ変動詞の持つ意味合いについて論じた。

㉒「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十八) 漢字五字・六字」『愛知学院大学禅研究所紀要』三五 二〇〇七……正法眼蔵の漢字五字(二語)・六字サ変動詞(一五語)を掲げた。

㉓「正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十九) 漢字七字・八字」『愛知学院大学禅研究所紀要』三六 二〇〇八……正法眼蔵の漢字七字(七語)・八字サ変動詞(二三語)を掲げた。